



古今著聞集

一

記 和文
號 17 17 .
冊 20 冊 1 内
文庫







古今著聞集序

夫著聞集者，寧縣亞相巧語之遺類，江家都督清談之餘波也。余稟芳橘之種，亂顧瓊枝之擗，質而琵琶者，賢師之所傳也。儻辨六律六呂之調，圖畫者，愚性之所好也。儻自養一日一取之心，於戲春鶯之囀，花下秋鴈之叫，月前暗感幽曲之易和，風流之隨地，勞品物之叶天，為悉憶，教筆之可寫，繇茲或伴伶客，潛樂治世之雅音，或託畫工，略呈振古之勝槩，蓋居多暇景，以降閑。





度祖年之故據勸此兩端搜索其度夏  
 緝為三十篇編次二十卷名曰古今著聞  
 集頗雖為任簡聊又兼實錄不敢窺漢家  
 經史之中有世風人俗之製矣只今知日  
 域古今之際有街談巷說之談焉猶愧淺  
 見寡聞之疎越偏招博識宏達之盧胡勞  
 不出端廬謬比鳴寶于時建長六年應鐘  
 中旬散木士橘南表愁課小童猥叙大較  
 而已

古今著聞集物目錄

- 卷一 神祇 卷一
- 卷二 釈教 卷二
- 卷三 政道忠臣 卷三
- 同 公事 卷四
- 卷四 文學 卷四
- 卷五 和奇 卷五
- 卷六 管絃舞 卷六
- 卷七 雜書 卷七
- 同 術道 卷八
- 卷九 卷九



卷八孝乃為忠 才十

同 好色 才十一

卷九武勇 才十二

同 弓矢 才十三

卷十了藝 才十四

同 扣撲強力 才十五

卷十一畫場 才十六

同 蹴鞠 才十七

卷十二格鬪 才十八

同 偷盜 才十九

卷十三祝言 才二十

同 哀傷 才二十一

卷十四抱鏡 才二十二

卷十五霜靴 才二十三

同 圖洋 才二十四

卷十六真言利口 才二十五

卷十七粧異 才二十六

同 變化 才二十七

卷十八飲食 才二十八

卷十九草木 才二十九



目錄終

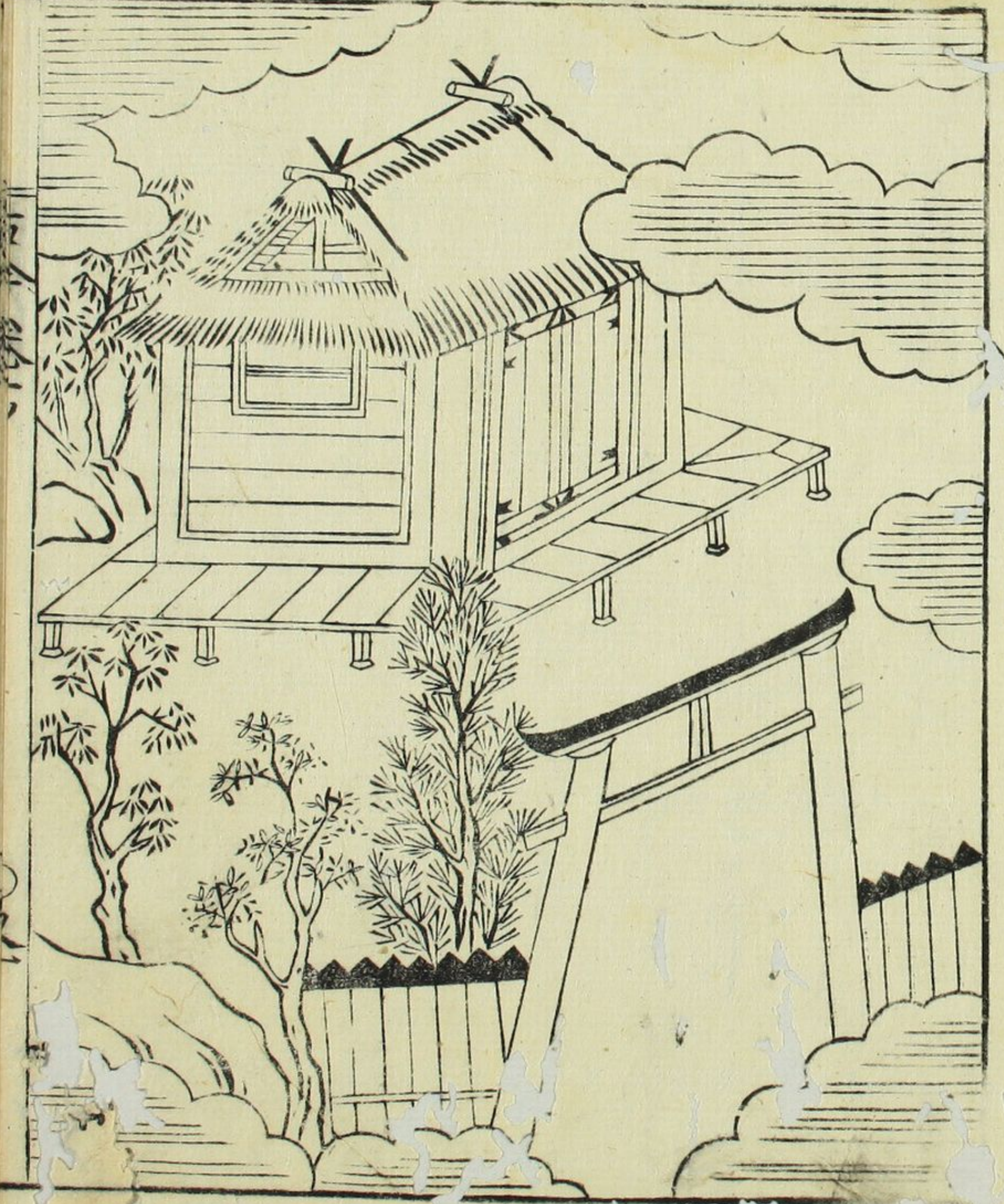
古今著聞集卷才一

神祇才一

天地いまごころのれど渾沌雞れ子のごとくその  
と免海の海かひなく天とありあはむるはあつ  
そあ海りく地とあ海とれよ天地のなるとい  
川のりのわりかこら葦牙れごとくそれとら此  
て神とあり國常とあきかりそれよりこの  
くこ天神七代地神八代より彦波瀲武鸕鷀草  
甕不合尊れゆ子神武天皇よりそ人代とあり  
よき海とのゆと成子れごとく九月ふるどら



りろくの神祇まつりせきり才十代崇神  
 六年あまのそと天照大神を足尾邑あしののちふまの山やまも海河七あまの  
 小天社あまのやしろ必社かなたとよび秘必諸社の神戸かみとささあ  
 其そのしら世よにたふり民ゆらうぬり才十代崇  
 元天皇二十六年三月ふあまてふ山神かみれはせ  
 るよあさぐひく伊勢いせれいといとれ川かみうみよいとい  
 て才二のひあみて備後命あまのあひのとあまよきてゆつと  
 ざりたそそりてうとん神かみあさりと大木あまれ神祇かみ  
 歌うたをんぞく権化かみのた威かみと意かみのあゆつとつと  
 のなりいとある神かみの皇かみ后かみれ三韓あまとあのと







少の免天<sup>てん</sup>邪<sup>じ</sup>地<sup>ち</sup>旅<sup>りょ</sup>あつぐりてわつりれあひせりて我  
 これふりてわつりてなぐもたに社<sup>や</sup>れそんぞん城  
 さご先<sup>せん</sup>とりのり百<sup>ひゃく</sup>五<sup>ご</sup>百<sup>ひゃく</sup>代<sup>だい</sup>のそんそんそん  
 昔<sup>むかし</sup>天子<sup>てんし</sup>よりんて先<sup>せん</sup>とりのりあまじんふりてあま  
 そのあつぐりてあまじんといふ事<sup>こと</sup>断<sup>つ</sup>らんて天  
 日<sup>ひ</sup>うれ<sup>れ</sup>神<sup>かみ</sup>宇<sup>う</sup>あんのや元<sup>もと</sup>年<sup>ねん</sup>の月<sup>つき</sup>日<sup>ひ</sup>ううこれや  
 神<sup>かみ</sup>う<sup>う</sup>せんよむいあうこれかよと男<sup>おとこ</sup>あ化<sup>くわ</sup>世<sup>せい</sup>  
 て方便<sup>ほうべん</sup>とあらして夜<sup>よ</sup>生<sup>せい</sup>城<sup>じょう</sup>とらびく名<sup>な</sup>をいひ  
 あまのうがえりといふれりやあまのうをいひ  
 わるれあまのうとくそんぞんぞれ



内付前ハビリハ長源殿よきあまうれまひりせ  
 らまもほとれづらぐれいのとてあうらむ  
 そのあそれほじそ温明殿ふる内をいり  
 比事いづまれば討のこらあつはかあ後情  
 深殿よりさうりきる便はそ内付あよき  
 めつ統ころむ板敷とたくきわきつ統  
 ころきゆそ天徳内裏焼亡は神鏡三河あり  
 ぎびりそあひくひんごんの極れ本よかからせあひ  
 ころあみあまのこあひひまづそて内付とあえ  
 てまひりてころとあひくひんごんの極れ本よかからせあひ

ろもくうけあひせらききれどとれくらまびり  
 て出袖よけせほころきつてとて作りされもひ  
 事一 製はる船を日れは祀よ云天徳元年九月  
 女日申れ別室光下末ト云火丸願諸羅玉  
 温明殿末之瓦上より有鏡面を經八寸臥維有一  
 瓶内規甚以分明露出俯破瓦上見之者其  
 或祀也れと小野宮殿の事みえはわが  
 りたると寛弘れせうりうみんをほころきれ  
 ともほじもくけをほころきりて討の公に勅  
 乃成にあり宸筆に宣命ハの討と海あり



長久燒亡ぬぐいけそんせう務娘よきゆそれより  
 そのあけをせあひつる灰とよりてくつひつふ入るり  
 ていまたりうまはそこのせうさぬ神鏡は海  
 よてみえつり神威のつとてあつたつりあつた  
 だれども世のつりめと志考のあつたつり  
 ゆをせあつて今つりあつたつりあつたつり  
 延長八年六月廿九日在真宗法師初紙のつり  
 湯屋は候とて念佛しつりあつたつりあつたつり  
 のひさしに大つりあつたつりあつたつり  
 せつりあつたつりあつたつりあつたつり

公名つては又小人のあつたつりあつたつり  
 りりて女あつたつりあつたつりあつたつり  
 とつりてひさしとつりあつたつりあつたつり  
 大般若のつりあつたつりあつたつり  
 事りつりあつたつりあつたつりあつたつり  
 とつりあつたつりあつたつりあつたつり  
 事はのつりあつたつりあつたつりあつたつり  
 ねつりあつたつりあつたつりあつたつり  
 うせあつたつりあつたつりあつたつり  
 法つりあつたつりあつたつりあつたつり



唐の時大師の法法とまるとんちろひ終くかこら成  
あつりかの寺よ何と成れ多慮の圓満法徳の  
とく光る業統とおあゆみれきり明神とあめんせまひ  
て一首の和歌と深宣一終き成

わつあ終に法海そりほこころひを

わりのを終りの成あまそありて

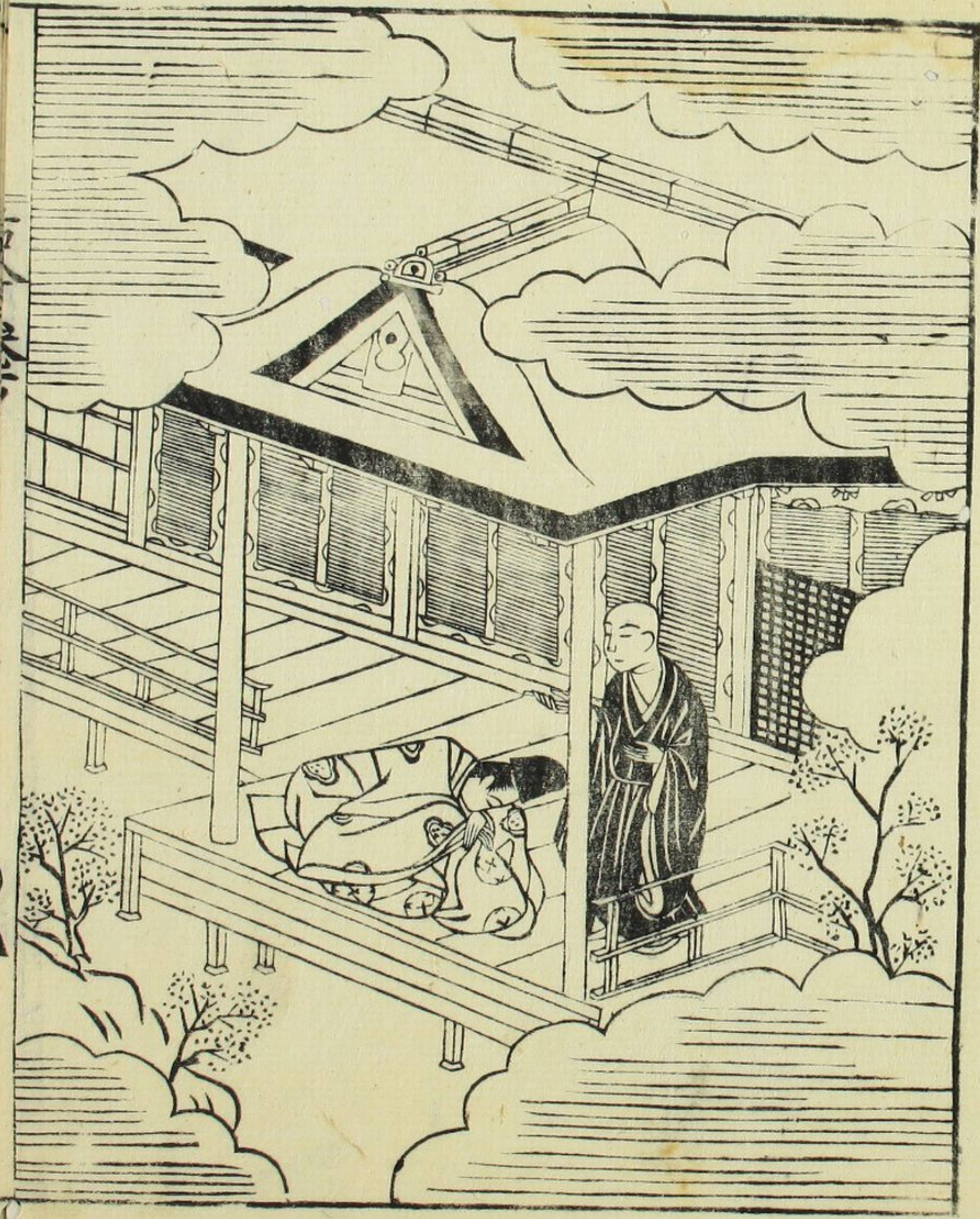
慈覺大師の法法とまるとんちろひ終くかこら成  
あつりかの寺よ何と成れ多慮の圓満法徳の  
とく光る業統とおあゆみれきり明神とあめんせまひ  
て一首の和歌と深宣一終き成

アされまれば後名の神とまるとんちろひ終くかこら成  
あつりかの寺よ何と成れ多慮の圓満法徳の  
とく光る業統とおあゆみれきり明神とあめんせまひ  
て一首の和歌と深宣一終き成



まのりなりぞぞ

小野宰相あり天祚四世は苗裔之由融院の法  
 住持なりその名を養ゆしをかりにはきり天元  
 元年よた宰相大式小住して同元年九月は府丹  
 つきて安東ありとておんまのりをきりよ堂舎あり  
 とりて塔婆いまごころに建たれりんまのり  
 わりせゆよのりく遠望と始り統々の聖廟あり  
 及び思念をりおん永観二年六月廿九日け御  
 宣旨のいづく大式下兼或大南寺に希ふは  
 赤面同大式下内介大末孫又お信心修造









の後那(ゆめ)く書(き)二(に)年(ねん)よ系(けい)儀(ぎ)は任(にん)じ寛(かん)弘(こう)  
 六年十二月十八日(に)ま(ま)てう(う)せ(せ)給(たま)ふ(ふ)後(ご)那(な)く(く)わ(わ)る(る)れ  
 て叢(そう)洞(どう)と厩(うま)壇(だん)を傍(そば)よの(の)う(う)ち(ち)萬(まん)末(まつ)の(の)二(に)年(ねん)三(さん)月(げつ)よ  
 僧(そう)正(せい)一位(いち)に(に)加(か)階(かい)よ(よ)あ(あ)つ(つ)り(り)あ(あ)ひ(ひ)ま(ま)り  
 一(いち)系(けい)院(いん)津(つ)上(じやう)守(しゆ)時(とき)重(じゆう)と(と)い(い)ふ(ふ)今(いま)五(ご)千(せん)部(ぶ)に(に)任(にん)じ  
 隆(りゆう)通(つう)に(に)孔(こう)心(しん)よ(よ)あ(あ)う(う)ま(ま)き(き)れ(れ)九(く)身(しん)海(かい)川(がわ)一(いち)く(く)と(と)て  
 僧(そう)を(を)人(ひと)の(の)う(う)ち(ち)へ(へ)あ(あ)つ(つ)て(て)い(い)ら(ら)う(う)ひ(ひ)ほ(ほ)思(し)ひ(ひ)の(の)く(く)日(にち)に(に)  
 屏(びん)ろ(ろ)本(ほん)満(まん)ぐ(ぐ)二(に)ふ(ふ)く(く)形(かたち)に(に)ま(ま)る(る)祿(りやく)感(かん)を(を)え(え)と(と)か  
 ざ(ざ)ら(ら)れ(れ)上(じやう)守(しゆ)よ(よ)あ(あ)ま(ま)り(り)任(にん)じ(じ)に(に)定(ぢやう)む(む)あ(あ)れ(れ)と(と)い(い)ふ(ふ)ん(ん)を(を)  
 へ(へ)く(く)子(こ)の(の)任(にん)成(じやう)始(し)と(と)い(い)ふ(ふ)を(を)夜(よ)に(に)愛(あい)ふ(ふ)小(せう)を(を)任(にん)持(ぢ)

事(こと)く(く)ま(ま)ら(ら)れ(れ)た(た)ゆ(ゆ)一(いち)系(けい)に(に)て(て)ん(ん)ど(ど)く(く)ら(ら)い(い)つ(つ)る(る)こと(こと)に(に)  
 ぞ(ぞ)感(かん)後(ご)と(と)あ(あ)つ(つ)て(て)か(か)り(り)は(は)ま(ま)り(り)耐(たい)重(じゆう)か(か)作(さく)は(は)六(ろく)  
 能(よ)く(く)あ(あ)り(り)ゆ(ゆ)い(い)と(と)あ(あ)ま(ま)り(り)を(を)れ(れ)ど(ど)中(ちゆう)任(にん)日(にち)の(の)一(いち)系(けい)乃(の)  
 守(しゆ)後(ご)十(じゆ)禪(ぜん)師(し)と(と)あ(あ)つ(つ)て(て)ま(ま)を(を)あ(あ)ひ(ひ)く(く)新(しん)と(と)あ(あ)ん(ん)祿(りやく)した  
 ま(ま)ひ(ひ)き(き)ゆ(ゆ)  
 一(いち)系(けい)の(の)四(し)位(い)法(ぽう)成(じやう)を(を)ま(ま)り(り)人(ひと)に(に)ま(ま)り(り)  
 三(さん)世(せい)の(の)任(にん)の(の)所(しよ)に(に)あ(あ)り(り)ま(ま)り(り)  
 耐(たい)重(じゆう)の(の)下(げ)も(も)あ(あ)り(り)ま(ま)り(り)う(う)ち(ち)く(く)受(う)つ(つ)て(て)生(しやう)死(じ)を(を)あ(あ)ら(ら)わ(わ)り(り)  
 づ(づ)ら(ら)と(と)あ(あ)れ(れ)い(い)つ(つ)と(と)あ(あ)ま(ま)り(り)ま(ま)り(り)だ(だ)  
 極(ごく)楽(らく)の(の)道(みち)れ(れ)あ(あ)る(る)べ(べ)い(い)の(の)身(み)成(じやう)う(う)ち(ち)に(に)あ(あ)る(る)



ふ甲乙丙のちんちんなりきり

扱うてせまひきつぐき御りて又御せをきき

おまじり人のうへみえんあさん

ひあひさつれきありとせな

をきをゆつて中紙終るあくさうきひきり

わりれよあうさじり

長曆二年は天官座主此録りてさうりき

三升ち此明る大僧とあるさうりては圓白あ

さうり執りてをあひさう山僧びりてさうり特記

て十月廿七日ふら百人下流してなをける場よあ

まうりて養州とありにさうりびりよありて親月れ

交戒もさ海りきり内三年二月十七日山僧雲白

此門あへ事りてさうり千八百もあさくあめ

のくしれあまびてあそけを平此本方内整員

小作さきくささうり終る終るよあさうり

りのお母りきりあれ終る山僧山僧於明る僧

正し同宗れあえをきれ山僧ああをあめあ

さうりいさうりさうり意折あてゆさふさうり

秀僧都座まよああさうり終る良秀あ僧於終

起の終りんとて執執あさうり言終る同七月



亦自より玉所きつなりぬ事なる海への水行  
たせと取りれされ沖滅なりて目殺はのせ行  
き海にた八月十日さんすつれ徳宣のえあ僧  
於せぬれ多りも後たどむくは滅ありける嚴寺  
なる事なり

同年仲法大中臣佐國宗王不那りしりきり  
月之申月二日若菜文此は徳宣小宗王那也  
ら於たはは河りきり遷宮れりよ殿室は事大  
われ大恐れあまふるる六月亦六月依玉つぬ  
亦停皇の由一流れよきりうへ行は七月十日若

亦文宗文の内信は徳宣ありあま配座なる  
るうべとありきり同十六日むきりては徳宣あり  
佐玉が孫清依とめく作れりるは依玉と流る  
りあうるづりば先月此徳宣あも配座なる那  
御るきくのおうく大さあり徳りありとこむる  
旨道理よそむきりもやきりあつたはな  
養父まどは依玉の由ご停路此由のさうひをぬらふ  
めとつとて和定徳とそりぬは是る依とつ  
らて考よつたされなりびり養父さる流れ



同日十九日依<sup>ま</sup>御<sup>み</sup>め<sup>め</sup>一<sup>く</sup>く<sup>さ</sup>れ<sup>り</sup>と<sup>あ</sup>ん<sup>ん</sup>と<sup>い</sup>は<sup>れ</sup>宣<sup>ま</sup>  
と<sup>び</sup>く<sup>み</sup>を<sup>り</sup>の<sup>り</sup>下<sup>へ</sup>あ<sup>ら</sup>り<sup>き</sup>を<sup>し</sup>

延久二年八月三日つづ<sup>れ</sup>出<sup>し</sup>の<sup>こ</sup>や<sup>れ</sup>出<sup>ま</sup>せ<sup>ん</sup>

小幡<sup>こはた</sup>雄<sup>ゆ</sup>の後<sup>のち</sup>まで<sup>に</sup>三年<sup>よ</sup>は<sup>た</sup>ふ<sup>い</sup>ま<sup>明</sup>王<sup>を</sup>代<sup>り</sup>國<sup>を</sup>

と<sup>お</sup>し<sup>り</sup>の<sup>時</sup>は<sup>ら</sup>と<sup>て</sup>若<sup>ら</sup>と<sup>と</sup>と<sup>え</sup>生<sup>ま</sup>と<sup>し</sup>修<sup>め</sup>

その<sup>こ</sup>れ<sup>よ</sup>う<sup>り</sup>て<sup>海</sup>濱<sup>を</sup>と<sup>え</sup>き<sup>れ</sup>ど<sup>め</sup>珠<sup>一</sup>顆<sup>わ</sup>り

き<sup>り</sup>の<sup>は</sup>正<sup>新</sup>よ<sup>と</sup>が<sup>あ</sup>る<sup>り</sup>を<sup>り</sup>を<sup>り</sup>し<sup>り</sup>と<sup>し</sup>

後<sup>に</sup>系<sup>統</sup>の<sup>時</sup>に<sup>あ</sup>の<sup>こ</sup>ら<sup>に</sup>物<sup>産</sup>の<sup>は</sup>ま<sup>り</sup>た<sup>る</sup>

あ<sup>ら</sup>わ<sup>り</sup>入<sup>り</sup>海<sup>に</sup>あ<sup>ら</sup>わ<sup>り</sup>を<sup>し</sup>と<sup>宣</sup>旨<sup>と</sup>の<sup>旨</sup>

と<sup>し</sup>

と<sup>し</sup>れ<sup>く</sup>み<sup>つ</sup>と<sup>物</sup>産<sup>の</sup>は<sup>ま</sup>り<sup>た</sup>る<sup>に</sup>は<sup>違</sup>録<sup>に</sup>

わ<sup>り</sup>を<sup>り</sup>に<sup>社</sup>の<sup>や</sup>り<sup>れ</sup>本<sup>一</sup>あ<sup>ら</sup>り<sup>主</sup>と<sup>し</sup>

あ<sup>ら</sup>わ<sup>り</sup>れ<sup>と</sup>る<sup>を</sup>結<sup>と</sup>と<sup>先</sup>や<sup>ら</sup>れ<sup>た</sup>本<sup>一</sup>を

た<sup>あ</sup>ら<sup>わ</sup>く<sup>さ</sup>う<sup>え</sup>に<sup>ら</sup>う<sup>ら</sup>後<sup>亦</sup>も<sup>入</sup>海<sup>と</sup>の<sup>旨</sup>

大<sup>学</sup>寮<sup>庶</sup>供<sup>六</sup>省<sup>の</sup>の<sup>旨</sup>と<sup>あ</sup>ら<sup>り</sup>と<sup>あ</sup>ら<sup>り</sup>と<sup>あ</sup>ら<sup>り</sup>

わ<sup>り</sup>人<sup>は</sup>後<sup>よ</sup>尼<sup>又</sup>れ<sup>宮</sup>り<sup>く</sup>な<sup>ら</sup>ま<sup>り</sup>て<sup>は</sup>ま<sup>り</sup>た<sup>る</sup>

あ<sup>の</sup>お<sup>ふ</sup>こ<sup>の</sup>り<sup>に</sup>後<sup>に</sup>を<sup>り</sup>と<sup>あ</sup>ら<sup>り</sup>と<sup>あ</sup>ら<sup>り</sup>と<sup>あ</sup>ら<sup>り</sup>

と<sup>あ</sup>ら<sup>り</sup>と<sup>あ</sup>ら<sup>り</sup>と<sup>あ</sup>ら<sup>り</sup>と<sup>あ</sup>ら<sup>り</sup>と<sup>あ</sup>ら<sup>り</sup>と<sup>あ</sup>ら<sup>り</sup>

と<sup>あ</sup>ら<sup>り</sup>と<sup>あ</sup>ら<sup>り</sup>と<sup>あ</sup>ら<sup>り</sup>と<sup>あ</sup>ら<sup>り</sup>と<sup>あ</sup>ら<sup>り</sup>と<sup>あ</sup>ら<sup>り</sup>

と<sup>あ</sup>ら<sup>り</sup>と<sup>あ</sup>ら<sup>り</sup>と<sup>あ</sup>ら<sup>り</sup>と<sup>あ</sup>ら<sup>り</sup>と<sup>あ</sup>ら<sup>り</sup>と<sup>あ</sup>ら<sup>り</sup>











とありてはく宮下と此よりと少内記相承也  
とぞ果てはつれづれに宮下より少内記相承也  
自漢より世をゆきして二月五日に  
よりありてはく

真書云 彼宜令伺

天皇 詔肯止 掛長 其大神乃 廣前 尔忍  
申給此 申頃 今年之春 尔依之比 雨澤頃旬  
穀有年 信支由 令祈申 給而 神明 乃  
依 務穡 豊登 期給 頃月早 雲久 凝膏  
不瀟 百穀 涸 礼 万民 苦業 大神 日域

岳跡 信苗 遂窟 兩師 傳名 信苗 靈詞 茲則 名山大  
澤 柳興 雲致 雨赤 土得 潤澤 之應 濟晴 諒  
収獲 之功 止波 大神 无限 冥助 可在 所  
念行 祭天 故是 以吉 日良 辰 擇定 天宮 位  
姓名 中 卷使 天 礼代 乃 大幣 乎 令捧 持 黑毛  
御馬 一疋 奉 副 奉出 賜布 掛長 大神 此  
狀 乎 平久 聞食 天 炎氣 忽 散 嘉澍 旁  
降天 田園 滋茂 天 人民 豊稔 祭良 天皇 朝廷  
平 寶位 魚動 久 常石 堅石 尔 夜守 月守 尔 護  
幸給 比 食国 乃 天下 無為 無憂 尔 守恤 給 止











見たりふふくくと始りれば其の  
てふより厚くぞく承ていふてあて給ひるのいふ  
下篇をいふといふをいふに非ぬれあつた

寛保二年二月廿二日中納言実伴の目録に事行末の  
貴しう従二位をゆるされ給はば大納言同官を  
あへりきふきりあげさ給はば時々出仕さるれ事  
同日より出仕さるりたり給はば大納言大納言  
此より事行末に事行末のりて同年八月十七日  
従二位をゆるされたりされも下篇に事行末二年  
十月廿二日大納言此より大納言小任り

わづもろくみく従後をいふ承元元年八月廿日大納言  
と辞して正二位成申さるらんざららんを承元  
加階の例あげき給はば実伴のいふらんの大納言  
思へられらるとぞとていふされ侍りて成世の人か  
わえりきりあひまじくう成成りてひそに事行末  
後くあのみま承元の定をいふ事行末を承元  
表とや後よりんがばは承元をいふ事行末を承元  
あひきり成成りいふまじくう成成りてひそに事行末  
此より事行末のりて承元をいふ事行末を承元  
みどりお桐の事行末と承元をいふ事行末を承元



思ふげく事なれし作しきせれど信仰の儀とのい  
親直のあひをりし下向せしれりもりしは信直なり  
秀白も多くゆえをゆかす。

羅官味忘九主目 忍服将達又交直

かそかれこ八とせよまをりあられり

後——こころしりしつりし

こころとまて其の人いしこりしあはれりし  
わして年月と少程は始兼元年三月又月妙音  
のりし内大信よりかりしをゆかす  
そはひく小松のあはれ大納言はたおしし

内大信小のちしきをゆかす  
六月又内大信よりちおと解し  
まひ願ひしこのまゆりしをたさく  
月日れをせれどいし  
なちおよわれよまのり  
きいはくゆれ宿系も  
同三年三月毎月いし  
大納言実直のち納言実直  
とぞい月仲の門府し



今道その時た納まかりり六条れた政大臣にせよ  
 てゆりきりもおのりし伸りされりいふれりや  
 中おののほの室あましくたすこれ曲とよつれ  
 面白なるるに安元年六月にむられきり  
 女の愛よ天下の政をたつらりてかたのたの  
 日本もはたけく地あましくせ給ふははるて  
 七月上旬祝久継がまやと田新よんてざり  
 泰親の時とて占りせきれで実あましく  
 依承元年九月宮舎に院いつくし海よ  
 西の又と川つら弟ありて下

若貴なる  
 徳をさせ給ひる

希代のよりあはれはるる文とに目おなうり  
 産人之内少補親経表紙中なるを  
 身おまれば徳のいづれ網をぬのり  
 子生をたのむればいづれをぬのり  
 小ありのくやまればいづれをぬのり  
 しあひとえて八幡よ訪ぐ七月ありて  
 ねるよゆまげありあましくいづれ  
 出動面より中へあましくいづれ  
 きれださる事ゆくあましくいづれ  
 件の傳年事あましくいづれ



お難まごころの入りし樂よやそのけりいづれお  
 とつひく人の出ゆりしはほくゆとやをまひりけ  
 そこのあるは成すくじある人の能くもしてを路を  
 や人よぬきれども月との形れゆりたりと著  
 てぞり細着さあねまて今生れけりあんとく  
 来世のさくごころのりきてなしくながれゆり  
 地よりくはまのほめはげすつあふはまをさげよ  
 きりい事山の恒舞が編糸の新生義日長れあひけさ  
 世はさるるはゆりよすこころのりけり  
 能く字ゆやんあといひすきよきりまへ八極よま  
 と

忽ちさうりさるるまよはるの成り成り一突をまの  
 誠よさけいゆきよて武内くめをれん長くまを  
 ありのを見まねどさよ白髪のはげりまははるま  
 かのあひゆあふ長くさあひひひひけ白く  
 ては指さげとびさうりきり又ゆあれ内よりも  
 れゆさうて世中さなれんはあうく時政がまよ  
 かりと世は成る一と作まねをれんく唯禰一と  
 おいませとさふかにあまのまきり出事とさうま  
 義時節下はは後身あやその子泰時までま  
 人よあわごりきり



世の事は麻も何と解くやうにふきり

ふれあひのよのたのこし

山崎は都下北條のあつたをききしにむくをたれ  
 前橋津吉橋次政都下よりかきよつうまの  
 ことしゆは東京のあつたをききしにむくをたれ  
 牛久戸究のあつたをききしにむくをたれ  
 社司とていひくは室敷よあつたをききしにむくをたれ  
 て後京北西のあつたをききしにむくをたれ  
 せりゆきんそとや文とあつたをききしにむくをたれ  
 社司氏人おる社のあつたをききしにむくをたれ

小百夜改ざん一をりしては京ゆるされまきり

儀事書末とて建立の教と書してそむきしにむくをたれ  
 小治へく内文よ七ヶ月えんろう七ヶ月のあつたをききしにむくをたれ  
 とあつたをききしにむくをたれ  
 せり月知くあつたをききしにむくをたれ  
 七月えんろうのあつたをききしにむくをたれ  
 とあつたをききしにむくをたれ  
 せりあつたをききしにむくをたれ  
 御二京のりらあつたをききしにむくをたれ  
 ちあつたをききしにむくをたれ



ごうそん人あわねん

然<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>盲<sup>ま</sup>目<sup>め</sup>の<sup>の</sup>者<sup>し</sup>齊<sup>せい</sup>燈<sup>とう</sup>と<sup>と</sup>て<sup>て</sup>眼<sup>まなこ</sup>の<sup>の</sup>つ<sup>つ</sup>らん<sup>らん</sup>  
 と<sup>と</sup>つ<sup>つ</sup>らん<sup>らん</sup>を<sup>を</sup>り<sup>り</sup>び<sup>び</sup>つ<sup>つ</sup>と<sup>と</sup>め<sup>め</sup>三<sup>さん</sup>身<sup>しん</sup>は<sup>は</sup>あ<sup>あ</sup>れ<sup>れ</sup>は<sup>は</sup>は<sup>は</sup>り<sup>り</sup>  
 々<sup>々</sup>れ<sup>れ</sup>を<sup>を</sup>燈<sup>とう</sup>と<sup>と</sup>眼<sup>まなこ</sup>の<sup>の</sup>せ<sup>せ</sup>て<sup>て</sup>打<sup>うち</sup>卧<sup>を</sup>つ<sup>つ</sup>る<sup>る</sup>後<sup>あと</sup>は<sup>は</sup>は<sup>は</sup>ら<sup>ら</sup>眼<sup>まなこ</sup>を<sup>を</sup>  
 い<sup>い</sup>れ<sup>れ</sup>な<sup>な</sup>る<sup>る</sup>よ<sup>よ</sup>わ<sup>わ</sup>く<sup>く</sup>秘<sup>ひ</sup>た<sup>た</sup>え<sup>え</sup>の<sup>の</sup>じ<sup>じ</sup>つ<sup>つ</sup>ひ<sup>ひ</sup>を<sup>を</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>め<sup>め</sup>八<sup>はち</sup>日<sup>にち</sup>  
 空<sup>から</sup>河<sup>が</sup>れ<sup>れ</sup>真<sup>まこと</sup>あ<sup>あ</sup>く<sup>く</sup>は<sup>は</sup>こ<sup>こ</sup>の<sup>の</sup>河<sup>が</sup>の<sup>の</sup>橋<sup>はし</sup>渡<sup>わた</sup>る<sup>る</sup>者<sup>もの</sup>後<sup>あと</sup>と<sup>と</sup>て<sup>て</sup>南<sup>なん</sup>無<sup>む</sup>念<sup>ねん</sup>  
 三<sup>さん</sup>所<sup>しょ</sup>燈<sup>とう</sup>親<sup>しん</sup>と<sup>と</sup>よ<sup>よ</sup>下<sup>した</sup>人<sup>ひと</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ま<sup>ま</sup>り<sup>り</sup>お<sup>お</sup>ま<sup>ま</sup>と<sup>と</sup>ま<sup>ま</sup>て<sup>て</sup>を<sup>を</sup>縁<sup>えん</sup>ふ<sup>ふ</sup>ら<sup>ら</sup>  
 て<sup>て</sup>真<sup>まこと</sup>縁<sup>えん</sup>の<sup>の</sup>弟<sup>あに</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ま<sup>ま</sup>て<sup>て</sup>を<sup>を</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>め<sup>め</sup>人<sup>ひと</sup>を<sup>を</sup>縁<sup>えん</sup>ふ<sup>ふ</sup>  
 ころ<sup>ころ</sup>は<sup>は</sup>齊<sup>せい</sup>燈<sup>とう</sup>此<sup>こゝ</sup>れ<sup>れ</sup>光<sup>ひかり</sup>よ<sup>よ</sup>わ<sup>わ</sup>く<sup>く</sup>縁<sup>えん</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>て<sup>て</sup>又<sup>また</sup>事<sup>こと</sup>無<sup>む</sup>明<sup>めい</sup>眼<sup>がん</sup>を<sup>を</sup>  
 え<sup>え</sup>て<sup>て</sup>此<sup>こゝ</sup>船<sup>ふね</sup>よ<sup>よ</sup>岸<sup>きし</sup>を<sup>を</sup>ま<sup>ま</sup>る<sup>る</sup>て<sup>て</sup>い<sup>い</sup>は<sup>は</sup>し<sup>し</sup>め<sup>め</sup>は<sup>は</sup>り<sup>り</sup>ま<sup>ま</sup>る<sup>る</sup>て<sup>て</sup>い<sup>い</sup>は<sup>は</sup>し<sup>し</sup>め<sup>め</sup>て<sup>て</sup>

み<sup>み</sup>づ<sup>づ</sup>り<sup>り</sup>よ<sup>よ</sup>我<sup>われ</sup>を<sup>を</sup>悔<sup>くは</sup>る<sup>る</sup>事<sup>こと</sup>あり<sup>り</sup>や<sup>や</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>は<sup>は</sup>し<sup>し</sup>め<sup>め</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ま<sup>ま</sup>て<sup>て</sup>を<sup>を</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>め<sup>め</sup>  
 たり<sup>たり</sup>と<sup>と</sup>後<sup>あと</sup>え<sup>え</sup>ん<sup>ん</sup>け<sup>け</sup>て<sup>て</sup>お<sup>お</sup>と<sup>と</sup>り<sup>り</sup>て<sup>て</sup>は<sup>は</sup>彼<sup>か</sup>と<sup>と</sup>て<sup>て</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ま<sup>ま</sup>て<sup>て</sup>を<sup>を</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>め<sup>め</sup>  
 程<sup>ほど</sup>よ<sup>よ</sup>眼<sup>まなこ</sup>を<sup>を</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ま<sup>ま</sup>て<sup>て</sup>を<sup>を</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>め<sup>め</sup>

勅<sup>とく</sup>使<sup>し</sup>は<sup>は</sup>え<sup>え</sup>後<sup>あと</sup>を<sup>を</sup>先<sup>せん</sup>進<sup>しん</sup>れ<sup>れ</sup>山<sup>さん</sup>が<sup>が</sup>し<sup>し</sup>の<sup>の</sup>如<sup>ごと</sup>く<sup>く</sup>日<sup>にち</sup>の<sup>の</sup>若<sup>わか</sup>く<sup>く</sup>大<sup>だい</sup>衆<sup>しゆ</sup>教<sup>きやう</sup>を<sup>を</sup>  
 の<sup>の</sup>是<sup>こゝ</sup>に<sup>に</sup>入<sup>い</sup>つ<sup>つ</sup>ふ<sup>ふ</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ま<sup>ま</sup>て<sup>て</sup>を<sup>を</sup>護<sup>ご</sup>り<sup>り</sup>も<sup>も</sup>補<sup>お</sup>せ<sup>せ</sup>ら<sup>ら</sup>ま<sup>ま</sup>て<sup>て</sup>を<sup>を</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>め<sup>め</sup>  
 養<sup>やしやう</sup>王<sup>わう</sup>寺<sup>じ</sup>ふ<sup>ふ</sup>と<sup>と</sup>て<sup>て</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ま<sup>ま</sup>て<sup>て</sup>を<sup>を</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>め<sup>め</sup>

山<sup>さん</sup>川<sup>がわ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ま<sup>ま</sup>て<sup>て</sup>を<sup>を</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>め<sup>め</sup>  
 流<sup>なが</sup>る<sup>る</sup>水<sup>みづ</sup>も<sup>も</sup>厚<sup>あつ</sup>く<sup>く</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>め<sup>め</sup>や<sup>や</sup>お<sup>お</sup>ま<sup>ま</sup>り<sup>り</sup>ん  
 是<sup>こゝ</sup>れ<sup>れ</sup>中<sup>ちゆう</sup>よ<sup>よ</sup>は<sup>は</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ま<sup>ま</sup>て<sup>て</sup>を<sup>を</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>め<sup>め</sup>

あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ま<sup>ま</sup>て<sup>て</sup>を<sup>を</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>め<sup>め</sup>山<sup>さん</sup>の<sup>の</sup>











とくぐくもさきどもはむらきわたる花山院の物あり  
おとくをたれりあがゆくあまも照りてはあまへ  
あまをつとめりくきりもはらみゆりあり

世けよ救あぬ身れ女千鳥

鳴もとされくもれ川あり

けあひのうららふらひつゝ移く世ふらじは  
事なりなりきりよは社司社司はあまの神はあま  
了そよこれ救あぬ身ありとよみくものくはあま  
けりあまをたれりあまをたれりあまをたれり  
は雅経れあまをたれりあまをたれり

いふく仙作のあまをたれりあまをたれり

二位宰相あまをたれりあまをたれり

和生に安二年に月一日を國宗あまをたれり

侍多き位階下氏人あまをたれりあまをたれり

おとくをたれりあまをたれりあまをたれり

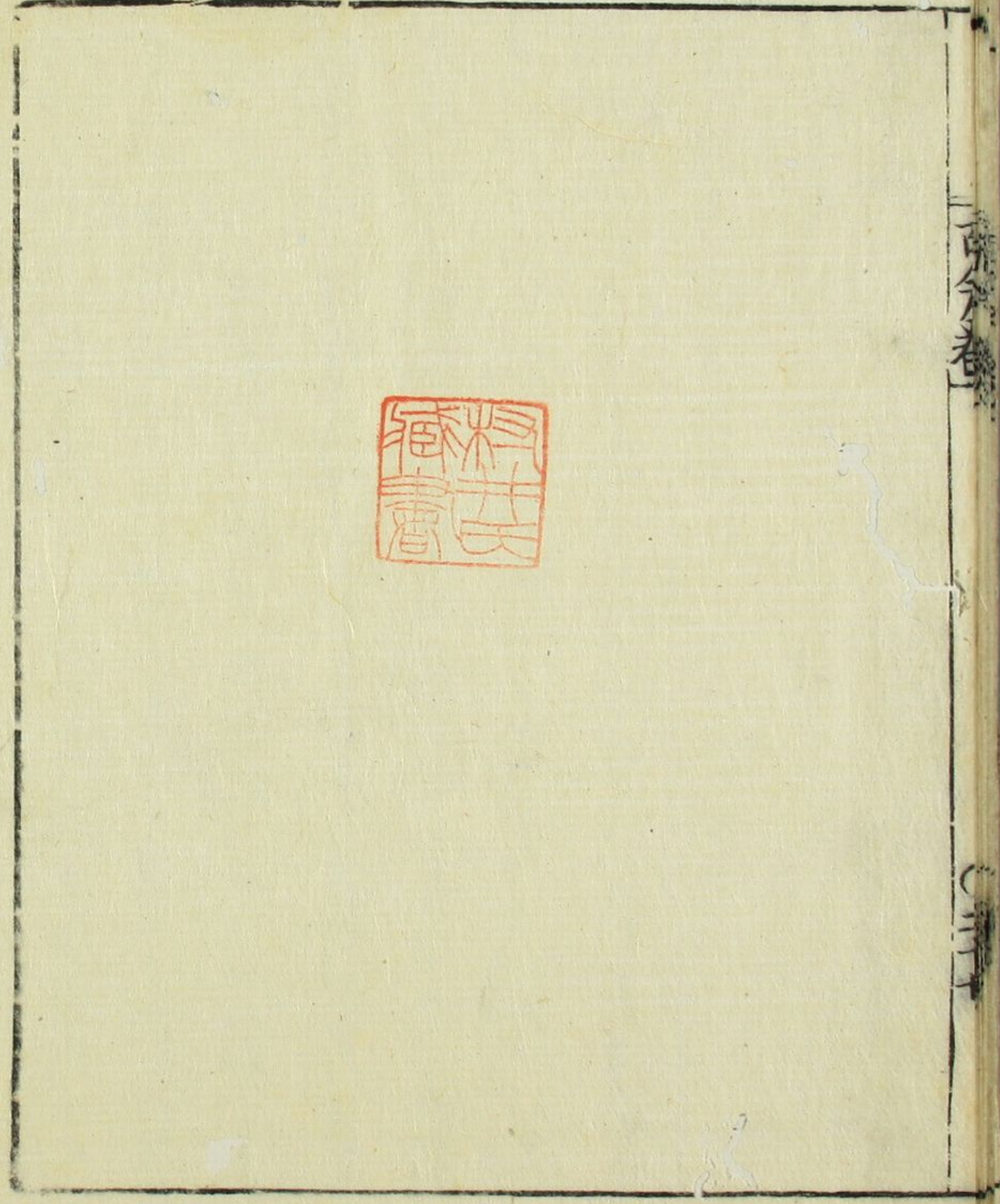
あまをたれりあまをたれりあまをたれり

あまをたれりあまをたれりあまをたれり

古今集集卷之一終



Blank page with faint bleed-through from the reverse side. The paper is aged and shows signs of wear, including foxing and small tears.



南  
分  
卷

三

Handwritten notes in the bottom left corner of the left page, including the number '10' and some illegible characters.



